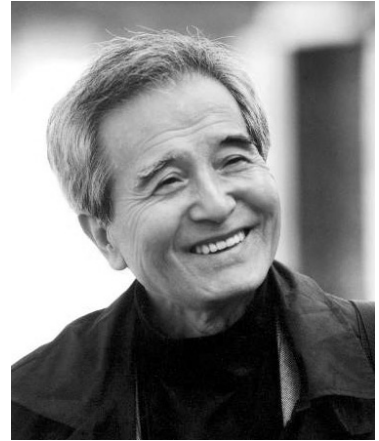


## 日韓都市計画の架け橋：康炳基先生

東京理科大学 嘱託教授  
渡辺俊一



本学会員であり、元大韓・国土計画学会会長の康炳基(カン・ピョンキ)先生は、2007年6月11日、逝去されました。享年75才(韓国式では76才)でした。

康先生は、1932年4月28日、韓国済州島済州市に生まれ、高校途中で単身日本へわたり、1958年東京大学建築学科を卒業後、大学院(丹下健三研究室)へ進学されました。1960年、金寿根氏らと共同で韓国の国会議事堂の公開コンペに1等に当選し、その後、丹下先生のURTEC等での勤務の傍ら、1970年「巨大都市の人口移動と通勤流動の構造と予測に関する研究」により、工学博士号を授与されました。

1970年、康先生は新設間もない漢陽大学(韓国ソウル市)の都市工学科へ教授として招聘され、約20年ぶりに帰国されます。以来、1996年に退任されるまで、約26年間にわたり教育・研究等につとめ、多くの教え子を大学・研究所・公社・産業界へ送り出されました。1982年から2年間は大韓国土・都市計画学会の会長として、研究体制と財政基盤の強化に成果をあげ、その後は1985年から7年間にわたり、同会の国際交流委員長として活躍されました。

1996年、請われて亀尾大の学長に就任し、4年間つとめられました。この間2000年には、韓国都市設計学会を設立し、初代会長として2年間指導にあたられます。その後2006年、「空間グループ」の常任顧問に就任され、活躍中の急逝でした。

康炳基先生は「韓国都市計画学界の第一世代」として、不断に内外の文献に接し、韓国での現場との関係を適切に位置づけながら、理論・実践の両面において、常に時代の先端を切り開き続けた第一級の研究者です。また、中央・地方政府の都市計画関係の諸委員会では、議論を的確にリードされました。誰とでもにこやかに接する、温和で慎み深い人柄の反面、自身には非常に厳しく律する「外柔内剛」型の典型的な学者であり、多くの人に敬愛されました。

日本との関係でいえば、1970年代以来、対日感情の極めて厳しい韓国にあって、康先生は、日本都市計画を最も正確に理解し、日

韓両国が相互に学びあうことの利益を自覚し、主張した最初の学者でした。

1980年、東大に研究教授として招かれ、日本のまちづくりに触れると共に、そののち川上秀光先生たちと共に、日韓台を中心とする国際シンポジウムを制度化されました。当時の韓国の厳しい状況を考えて、これは康先生だからこそ可能であったと言えましょう。これらの功績に対して2002年、日本都市計画学会から国際交流賞を授与されました。

還暦を迎えた1990年代以降、先生の関心は、都市のあり方における市民活動と、あるべき都市像としての都市デザインへと集約してゆきます。1996年「歩きたい都市づくり市民連帯(通称・市民連帯)」を自ら設立し、代表をつとめられます。康先生は常に健全な少数派を思う「草の根デモクラシーの都市計画」(自身の言葉)の必要性を説かれました。特に近年、韓国では官民学一体となって「住みたい都市づくり」運動が展開されている中、康先生の永年の主張である「住民による、下からのまちづくり」(同上)がようやく制度面にも反映されると期待して、指導に乗りだそうとした矢先の急逝でした。

2006年以来、日韓台の若手まちづくり研究者のネットワークである「ASCOM」の韓国側の仕掛け人として尽力されました。6月11日、その研究会が開催された会場で、同日朝の康先生の訃報が伝えられ、出席者に大きなショックを与えました。

私事にわたりますが、私は2日後の13日に举行された永訣式(告別式)に参列し、引きつづき竜仁市の公園墓地で行われた埋葬式にも加わりました。韓国式の土葬は、私にとって最初の体験でしたが、康先生のご遺体は棺から担ぎ出され、地中の穴深くへと丁寧に安置され、遺族をはじめ参列者一同が、順に土をかぶせて最後の別れを惜しみました。

(注:本稿作成にあたり、牧園大学・李鍵鎬教授の助力を得ました。なお、葬儀の詳細は以下をご覧ください。

<http://watanabe-s.cocolog-nifty.com/blog/2007/06/index.html>